▲悪戸新田獅子舞(古河市指定文化財)

モチが供えられている光景。どこかの寺の鐘が落下したという噂があり、この話を聞いたものは、必ずボタモチを辻に供えないと一家災難、あるいは子供が病気に襲われるというのである。このようにひとびとは神仏に頼らざるを得ないほど、不安な日々を送っていました。

そんな不安が大きく爆発したのは6月1日に始まるチフスの大流行でした。4月から伝染病予防のポスター、映画、講演会、予防接種の励行など、病に対して警戒していた当時の古河町でしたが、このチフスは多くの人を悩ましました。

凄惨なチフス流行と神仏への祈願

当時のある町会議員は、新聞のインタビューに次のように語っています。「どうも困つた歳が来たものだ、なにしろ毎日数人づゝの患者がふえて行くのだからたまらない」と。最初の診断から2週間後には、「未曾有と云はるゝチブス流行」と称され、当時保健衛生を所管していた古河署は、7月末までで、管内に120名あまりの患者、そして20名の死亡者があったことを発表しているのです。

こうしたチフス流行に際して、ひとびとの反応はといえば神仏への祈願でした。たとえば、弘法大師を21日参拝すれば未然に防ぐことができるとか、東向きの観音を7堂お詣りすれば悪疫にかからないというところもあり、そうかと思うと八幡神社でお百度詣りがよいなどというところ、いやいや天満宮だというところも。そうしたなかで、本来、悪疫退散ではじまったとされる悪戸新田獅子舞が雀神社の祭礼に復活しました。25年間休止していたその期待感は想像以上のものがあり、当時の新聞記事によれば、「二十六年目で復活する『ドンドコレーロレーロレ』のお獅子舞子の前人気は大変なものだ」と前評判の高さを記している。

折からの不安な毎日、そこに疫病の発生。神仏に頼る者は少なくなく、昭和2年は、どうしてもこれを打開せずにはおられない状況があったのです。悪戸新田獅子舞復活の直接的な契機は、もしかしたら、この年のチフス大流行だったのかもしれません。

あらためて調べて見たわたくしですが、近頃記憶が曖昧となる症状がよくあります。これなども、獅子舞や神仏への祈願で払拭できれば幸いなのですが。なによりもこれは悪疫ではないですな。もっとも、願ったところでそんなわがまま、神仏でも聞いてはくれませんな。

古河歴史博物館学芸員　立石尚之

▲雀神社の祭礼(昭和31年)